

ルーマニアにおけるストリートチルドレン保護活動

～子どもたちの笑顔を増やす～

堀口 かえで

(15-1, ルーマニア, ソーシャルワーカー, 大東市立谷川中学校)

1. はじめに

7年間の中学校での勤務経験後、平成15年4月から派遣前訓練を受け同年7月から平成17年3月までルーマニアに派遣されていた。ソーシャルワーカーとしてストリートチルドレンの保護活動がその活動内容である。

活動の目標は「子どもの笑顔を増やす」「生きる力を育てる」「一人ひとりとの出会いを大事にする」であった。これは現在の教育活動でも変わらない、私の信念にも通じている。

1年7ヶ月の刺激的で濃厚な経験が語り尽くせるとは思わないが、活動の一部を紹介したい。

2. 派遣国及び派遣先の概要

(1)ルーマニア コンスタンツア

ルーマニアは本州と同じくらいの大きさで、黒海に面する東欧の国である。民族は東欧唯一のラテン系民族国家である。ローマ帝国やオスマントルコに支配された歴史を持ち、社会主義時代はチャウセスク大統領の下で独裁的政治が1989年まで行われた。宗教はルーマニア正教が9割を占める。言語はルーマニア語が使われている。

コンスタンツアは黒海のリゾート地がある地方都市である。夏には国内外から観光客が訪れにぎわう。また、トルコ系、タタール、ギリシャ系、中国系、マケドニア系、ロシア系、ドイツ系、ロマ族、ルーマニア人といった多くの民族が住む町である。

(2)コンスタンツア社会福祉子ども保護局（配属先）

ルーマニアには主要な5都市に子ども保護局がある。その一つがコンスタンツア社会福祉子供保護局である。本局は成人対象の社会福祉局と18歳以下を対象とする子供保護局に分かれる。さらに、子ども保護局は孤児、小児エイズ、障害児、ストリートチルドレン、養育家庭と専門部署に分かれ、子ども保護施設も12施設を運営している。1997年頃に7人のスタッフで子供保護局を開局し現在では約1000人のスタッフが働いている。

私の所属先は、ストリートチルドレンの為の一時保護所を併設するストリートチルドレンの為の情報案内センターである。ここでは保護された子どものファイルを作成し、必要に応じて各保護施設等へ送致する機関である。また各NGO団体とも連携をとっている。

(3)ルーマニアにおけるストリートチルドレンの状況

ルーマニアにおける子どもの保護状況は（ストリートチルドレンだけではない）、200

4年の時点で、保護施設数1,363施設、保護人数(0~18歳)29,821名である。年齢別の割合を見ると、1歳未満は養育家庭に引き取られる為、幼児の割合は少ないが、10歳以後保護割合は増加し、14~17歳の少年が最も多い[参考1] このうち、コンスタンツァ子ども保護局で扱う子どものファイル数は2,741名分と約1割を占める。

ストリートチルドレンの数は把握できていないのが現状である。コンスタンツァの場合でも、観光シーズンである春から夏にかけて増加し、冬は減るというように季節的な変動が大きい。

ストリートチルドレンになる理由としては、家族の暴力(飲酒)や貧困が多い。生活場所は、マンホールや建物の階段や廃屋が多く、特に零下になる冬にはマンホールに入る場合が多い。生活の糧は、物乞いや窃盗、売春等犯罪率が高く、一般の人からも敬遠されている。シンナー乱用の例も多い。首都の地下鉄等駅付近では、シンナーの袋を口に当てた姿も多く見られる。

2007年EU加盟をめざし、ストリートチルドレンの問題も海外からの支援を受けながら、取り組まれつつある。

3. 派遣中の活動(資料1参照)

私の活動は、子ども保護局内のストリートチルドレンの情報案内センターを拠点として、ストリートチルドレンに関わっていくことである。最初の活動計画は、ストリートチルドレンの現状把握 施設(併設の一時保護所)内における子どもの活動の充実 ルーマニアの子どもたちとその社会環境の把握であった。活動していくうちに、自分のできること、したいこと、必要なことに少しずつ気づき、活動が展開していく。

途中から、活動計画を 子ども保護局とNGOとの関係強化 子どもの保護・施設への定着率の強化 国民のストリートチルドレンに対する理解へと変更した。具体的には各NGOと連携をとり、1回/2月のペースでイベントを実施した。イベントは、主に次の5つの利点があった。各施設のスタッフ同士をつなげ、アクティビティの交流や質の向上を図る 子ども同士をつなげ、友達をつくる 活動を通じ、子どもをほめ、自信や達成感を感じさせ、自己肯定感を育てる。施設が悪くないところであることを感じさせ、定着を促す(子どもたちは施設で規則正しい生活をし、十分な睡眠と栄養と清潔を得ることで、心が落ち着き、生きる力や学習へとつながる) イベントを実施することで、マスコミの取材を受ける機会となり、一般へ、施設の様子やJOCV(青年海外協力隊の略称)の活動を伝えることができる。

活動を、展開する中で、特に気を遣ったことは、イベント準備段階では、スタッフが、自分がイベントの主体であると感じること、またイベントに参加したスタッフや子どもが参加して楽しかった、やってよかった、また参加したいと感じることである。そのような雰囲気作りを大事にした。よい雰囲気を繰り返し経験していくことがスタッフにとっては仕事への意欲に、子どもには自己肯定観につながると考えた。

帰国4ヶ月前頃になって、周囲が大きく動き始め、活動の具体的な可能性が見え始めた頃、

活動のまとめをおこない、終了し、後任隊員へと引き継いだ。これらのイベントを通して、私自身、多くの子どもたちの笑顔に出会うことができた。

また、保護局外の活動として、日本文明・文化センターでの指導や柔術クラブの支援、日本語教室、ＪＯＣＶ有志のキャラバン隊活動があった。

４．青年海外協力隊としての役割

「新しい風をふきこむこと」が役割であったように考える。日本という国の文化と価値観を背負い日本人ボランティアとして、現地人の中で生活し、活動する。ルーマニア人の中に日本人が入ることだけでも、異文化の戦いがあり、その中で互いに理解し合えるところを見つけ、変化していく。新しいやり方や価値観がその居場所を作っていく、新たなものへ発展していくには、時間と忍耐と労力が互いにとって必要である。しかし、新たなものへ発展したときには、互いにとって、充実感や喜びを感じ、新たな可能性が見えてくる。

５．帰国後の活動

帰国後着任した本校では、派遣教員としての私にとってよい条件に恵まれていた。

なぜなら、校長先生が、ＪＯＣＶを支援するプラザ大阪の理事を務めておられ、新任教員にケニアの理数科教師で派遣されていたＪＯＣＶのＯＢがおられたからである。

校長先生が学校便り等で意識的に私の活動を紹介してくださったり、プラザ大阪からの情報を通じて、学校教育活動に巻き込んでくださったり、いろんな形での指導・支援を得ている。

またＯＢである教員とは、一緒に地域の祭りでインターナショナルフェイスペインティングを行った。ひとりでは踏み出せない一歩もたったひとりの仲間がいるだけで簡単に踏み出すことができる。

また他の職員も気軽にルーマニアや協力隊経験について質問してくださったり、雰囲気よく受け入れてくださっている。そういった学校全体の雰囲気が私の情熱を後押ししている。

(1)写真展（地域の生涯学習施設において、夏期休業日中に実施した。）

(2)「谷川まつり（地域教育協議会主催）」でのインターナショナルフェイスペインティング（ケニアとルーマニアの民族衣装をそれぞれ身にまとい、子どもたちにフェイスペインティングをしながら交流した。ケニアとルーマニアの写真も飾った。）

(3)文化祭でのルーマニアコーナー（写真、ルーマニアの子どもの書道作品、民芸品等を展示し、民族衣装を着ながら、ルーマニアについて紹介した。）

(4)人権選択学習（富田林市立明治池中学校にて、中学校３年生に２時間の授業を行った。ルーマニアや世界のストリートチルドレンをテーマに、フォトランゲージを利用しながら授業をした。）

(5)ルーマニアへ野球道具や文具を送ろう活動（ルーマニアからの要請によって、生徒会や地域の方の協力を得ながら物品を集めた。ルーマニアの元野球隊員も来校し、生徒会役員と話をした。）

6．派遣現職教員としての役割

大阪府では現在帰国した現職派遣教員は高校の教員と2名である。派遣中の隊員は複数名いると聞いている。これから、徐々にこの制度を利用した、経験ある教員が増えてくるだろうし、増えてほしいと願う。

派遣現職教員としての役割は大きく2つある。

一つは経験を語ることである。同僚に、地域の方に、そして子どもたちにである。ルーマニアの方々が私を通じて日本を見たように、日本の方々も私を通じてきっとルーマニアに触れることができるだろう。

もう一つは、異文化を、実生活を通じて経験したからこそ持つ、発想の豊かさや多様な価値観への理解を学校教育活動に生かしていくことである。

大阪では「ぬくもりのある教育」が大事にされてきている。「いじめ・不登校、高校中退」といった課題を抱える中、大阪らしい教育改革が行政から行われようとしている。2年ぶりに復帰した大阪の教育現場でも、スクールカウンセラーの活用の度合いや警察との連携、特別支援教育への具体化、学校評価の導入など、その変化を感じるところである。[参考2]

ルーマニアで子どもたちと関わっていたとき、印象的なことがいくつかあった。

一つはシンナーの乱用についてである。生きる希望や見捨てられたと感じているルーマニアの子どもは、シンナー乱用によって、廃人のようになっていく。数か月前まで話をしていたのに、次に会ったときには、手が震え、その次には、焦点の合わない目になっている。私が知らないだけかもしれないが、日本の子どもはここまで乱用しないのではないか。日本の子どもは寂しいが、自分をつぶすほどの一線を越える子はほとんどいないのではないかと感じた。

また、施設で、6・7歳の子どもたちとお母さんごっこをしようとしたとき、あるひとりの子どもが他の子どもを叩きながら、「あなたは悪い子。だからお母さんがおこります」と言いだした。初め、何をしているのか分からず観察していると、この子どもが家で受けていたことをやっているのだと把握した。ストリートチルドレンは虐待を経験している子どもが多く、体の傷だけでなく、落ち着きのなさ、怒りっぽさといった精神的不安定や成長の悪さ(もちろん喫煙も影響しているが)を共通して感じた。また場面操作が上手く、生きるためのずるがしこさ・たくましさもあった。

そのようなストリートチルドレンたちも一時保護所に入り、シャワーを浴び、散髪し、服を着替え、3回の食事と規則正しい睡眠を続けていると1週間くらいからほんの少し落ち着いてくる。表情もやわらかくなってくる頃から、鉛筆を持たせ、字を教える。はじめは5分間集中できればよい。線が書けるようになると「○や」、次は数字、アルファベットと進む。ほめながら一つできるようになると自信が芽生え、子どもは変化を見せ始める。

このような経験を通して、子どもたちは愛情をもって育てれば成長する可能性を持つ存在であること、生活リズムと健康の上に心の健康と生きる力の学習意欲が育つということを確信している。養護教諭として、その確信をもって、本校の学校教育活動に参加していきたい。

7．最後に

現職という形でボランティア活動に参加することができ、安心して、活動に没頭することができた。多くの方々のご協力の下に、このようなすばらしい経験があり、本当に心から感謝している。

この2年間の経験は私にとってとても刺激的な時間であった。日本では受けたことのない差別（中国人と間違えられ、からかいや中傷を多く経験した）を受け、なんともいえない悔しさと怒りも経験した。言葉の未熟なとき、自分の感情さえも相手に伝えられない孤独も味わった。自然の厳しさの前に人間の小ささも実感した。本当の優しさに多く出会い、優しさが大きな力や人の心を動かし、つながっていくことにも触れた。そして、たくさんの子どもたちがくれた愛情は、今思い出しても胸が熱くなる。そのような経験が、今の私のたくましさや情熱と笑顔につながっている。

日本の教育現場の多忙さにその情熱もしょっちゅう萎えそうになるが、自分の経験を振り返り、「こんなことで、めげてたらアカン。私にはルーマニアがついてる。」と自分に叱咤激励している。

谷川中学校の子どもたちも、本当に愛すべき存在である。子どもたちとともに、あったかい雰囲気のあるすてきな中学校になればと願う。

[参考文献]

- 1 .AUTORITATEA NATIONALA PENTRU PROTECTIA DREPTURILOR COPILULUI (2005),
In the INTEREST of the CHILD.
- 2 .大阪府教育委員会事務局スタッフ（2005）, 大阪は教育をどうかえようとしているのか, 明治図書

隊員活動の経過（2003年4月～2005年3月）

月日	活動の概要	活動の実際			隊員・周囲の様子
		子供保護局	保護局以外の活動	その他	
2003.4 ～6	訓練所入所 事前訓練				
2003.7	ルーマニアへ派遣				
2003.8	現地語学訓練 ホームステイ				* 買い物、散歩が冒険の様に感じる。ホームステイ先や語学の先生とぶつかりながらも、たくさん話をする。
2003.9	コンスタンツア子ども保護局で活動開始	* 子どもたちと共に1日を過ごす。午前中はアクティビティに参加			* 現地の方の勤務スタイルに戸惑いながら活動。
2003.9	「互いを知る時期」 * 町や子どもの様子 * 信頼関係	* サッカー大会（4施設参加） * 折り紙やオモチャ作りといったアクティビティの提案	柔術クラブ訪問		* 子どもを宥めようとしても、自分の語学力が低く、子どもを諭すことができない。アクティビティを提案しても子どもをコントロールできず悩む。子どもたちとともにルーマニア語や習慣を学ぶ。
2003.10	「小さな事から少しずつ自分をアピール期」	* C新聞社が隊員を取材		* ルーマニアの結婚式参加 * 冬に向けて、隣人に教わりながら食料の貯蔵を始める	* アクティビティの材料（文具等）の絶対的不足から調達方法を探し始める。 * 事務所ではカードや折り紙、工作等アクティビティの提案も兼ねて、いろんなものを飾りはじめ、スタッフに自分の出来ることをアピール。 * いろんなスタッフとひたすらおしゃべりをする。
2003.11	「配属保護施設情報収集期」	* C新聞社へ高校生記者の活動中にゲストとして訪問 * A 保護施設の閉鎖により子ども保護数急増	* 町を散歩しながら、アクティビティに必要な材料を集め始める。 * 日本文明・文化セン	* 他隊員日本文化イベント応援	* スタッフとも馴染み、話に広がりが出てくる。 アクティビティや子どもの対応についての話題が増える。 * 誕生日に日本料理を振る舞うが子どももスタッフも食わず、互いの理解への道のりを感じる。

		* インフルエンザワクチン接種 * 子供保護局の概要、スタッフの職種ごとの役割、衛生・健康管理等を中心に情報収集	ターという俳句の会に参加、指導開始。		* 文具を現地人や外国人などから少しずつ集めるが、スタッフがまず文具を欲しがり、生活の厳しさとモラルの低さを感じ、物品提供を慎重に行う。 * 他隊員のイベントに参加し、孤独な日々の活動とは違う、協力して大きな力となるイベントの良さを知る。 * いろんな地方を訪ねるたびに、ルーマニアの素敵なところを発見して、日常のマイナス面にとらわれず、新たな気持ちで配属先に戻ることが出来た。
2003.12	「配属保護施設一歩踏みだし期」	* 施設でのクリスマス * クリスマスのお祝いで各保護施設を訪問 * 他県の子ども保護施設及び病院訪問	* 柔術クラブ訪問	* 近所の子どもたちと話し始める	* 日常会話には困らなくなったが、仕事遂行にはまだ不十分。 * 各保護施設の訪問により、各施設のスタッフと知り合い、人間関係が広がる。
2004.1	「ルーマニアの宗教と家族にひたる期」	* C 新聞高校生記者が取材 * 「世界の笑顔のために」プログラム申請		* 宗教の祭に参加 * 他隊員ジャンプ大会応援	* ルーマニアの習慣、宗教にどっぷりひたりながら、ルーマニアの冬の生活を体験。
2004.2	「有志キャラバン隊企画準備期」	C 新聞高校生記者が通う高校へストリートチルドレンについての授業のため、同僚と訪問	* 柔術クラブが青少年の健全育成を目的としていることを理解し後方支援開始	畳の店が増え、道や店での立ち話が増える	* 他隊員の日本文化紹介イベントに参加する中で、日本文化に興味のない普通の人たちの興味を引き、両国を理解し合えるイベントをしたいと考え始める。
2004.3	「必要なこと気づき期」	* NGO との会議に参加するようになる。 * MGO 訪問開始		* 近所の方と「女性の日」を祝う - 芸術学校で絵や宗教絵を学び始める。 * 他隊員日本文化イベント応援	* 一般の子どもたちとの出会いが増え、学校や教員との輪も広がる。 * NGO 訪問により、各施設で働くスタッフとの関係が出来る。アクティビティ等に参加しながら、各施設のスタッフがそれぞれの知識で働き、他の施設でどんな風に行われているのかを知らないと感じ、スタッフ同士の横のつながりの必要性を感じる。

					じる。 * 芸術学校でスタッフ以外のルーマニア人の価値観・考え方に 出会う。絵画が自分の時間となり、ストレス解消となる。
2004.4 ～5	「活動展開期」	芸術週間、食週間、よいマナーとスポー ツと健康週間(4 施設参加、3 5 人 / 日) * 他県の子ども保護施設訪問 * 「世界の笑顔のために」プログラム申 請	* 俳句教室・日本語教 室 * 柔術クラブ訪問	近所の子どもたち 1 0 人が毎日迎えてく れるようになる。	* 初めての企画実施 * 芸術週間という企画の楽しさ、スタッフ同士や子ども同士の 出会い作り、マスコミのとりあげ方等でスタッフが私に興味を 持ち始める。また、各施設の子どもたちの間でも「カエデ」の 名が売れだした。 * 他県の施設見学等「カエデはいろんなことを見ているし、知 っている。話は聞いた方が面白そうだ」といろんな話を聞き、 企画に対する意見を求められるようになるが、十分ルーマニア 語で説明できず、上手く理解し合えない。
2004.5	「隊員への期待明確 化、議論期」	* ボランティアによるエイズ予防教育開 始 * こどもの日、施設裏で小さなピクニッ ク * 子どもの遠足場所探し	* 隊員を通じ、日本文 明文化センターのある 高校と子ども保護局が パートナー契約を結 び、子ども保護局スタ ッフによる高校での講 演や高校から保護施設 への寄付等が行われ た。	* 他隊員日本文化イ ベント応援 * 他隊員日本文化イ ベント応援	* 施設長と話す中で、「NGO との関係強化」「子供の保護、定着 率の向上」「国民のストリートチルドレン保護に対する理解の向 上」「マスコミの利用」について話し合い、確認する。その後、 この点について意識した活動を展開する。 * 保護施設のスタッフとアクティビティについて会議を提案し た。保護局長まで巻きこみ、予算等を確認しながら、計画を立 案するが、継続しない。 * 子どもたちにとって狭い施設の中にいる時間が長いため、外 につれだし、ストレス発散の機会の必要性を感じ、遠足の企画 を始める。しかし、外国人ボランティアの責任範囲や子どもの 状態、資金がないことから断られる。 * 外国人ボランティアや外国人との輪が広がる・

2004.6	「ルーマニアを外から振り返り、自分を確定期」 「ストリートチルドレンの生活理解期」	* 路上で生活する子どもたちを訪問する活動に参加 * 遠足 * NGO 会議	* 俳句教室・日本語教室	任国外旅行(オーストリア・ポーランド・ドイツ) ドイツの日本人中学校で講演。各国で幼稚園、高校等を訪問。	* 路上の子どもたちと出会い、彼らの生活の様子が分かり始める。 * 田舎に祭を兼ねて泊まったとき、その生活の貧しさからストリートチルドレンとなっていく状況を現地の人から聞かされる。 * 日本の子どもたちへの講演や先進国の教育をみて、揺らぎつつあった信念を改めて確認する。 * 反対されていた遠足もスタッフの協力と無料入場が許可され、実施した。
2004.7	「子どもとの信頼実感期」	* 遠足 * NGO 会議 * 「世界の笑顔のために」プログラムで在籍中学校から文具が届く * 他県の子ども保護施設訪問	* 俳句教室・日本語教室 * 柔術クラブ訪問		* 私と子どもたちとの約束を施設長が破ったことがきっかけで、子どもたちがクーデターを起こし、施設長と子どもたちの話し合いがもたれた。その後、私の立場やスタッフへの教育、子どもたちの心をうけとめるといったことが確認され、施設内の雰囲気が少し変わる。
2004.8	「隊員活動展開期」	* 首都にある子ども保護施設で劇を通して交流する(100名参加) * 遠足 * NGO 会議	* 俳句教室・日本語教室 * ルーマニア日本人学校で授業	* 有志キャラバン隊結成(JOCV有志) * 他隊員のジャンプ大会応援	* 町を歩いていると、必ずストリートチルドレンと会い、集まるようになる。子どもたちの路上での本当の様子が分かり始める。 * 有志キャラバン隊で各隊員の充実感と手応えがあり、隊員間の雰囲気がよくなる。
2004.9	「営業活動期」	* 絵画コンクール(7施設、2幼稚園、9学校、個人の計145名参加)* 新聞でも広報 * 遠足 * NGO 会議 * 在ル日本人の方々に物品寄付協力のお	* 幼稚園・学校・子ども保護施設等の訪問活動を開始 * 俳句教室・日本語教室		* 積極的な訪問活動によって、ルーマニアの学校・幼稚園の様子、授業への参加、先生方との交流など、活動範囲の幅が広がった。 * 子ども保護施設も、市内だけでなく県内の施設も訪問。ストリートチルドレンだけでなく、孤児、エイズ等の施設も訪問。その為、子ども保護局内の他のソーシャルワーカーとの人間関

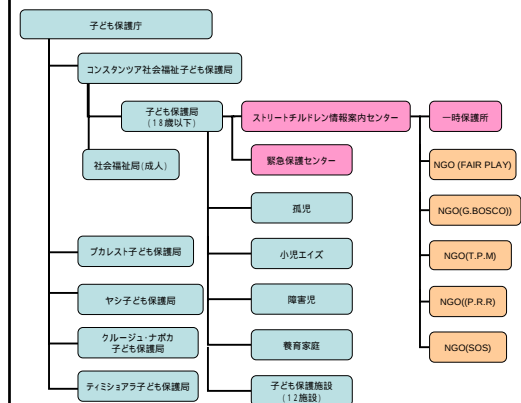
		願い訪問開始			係もひろがり、ストリートチルドレン以外の部署へも自由に入り入るようになり、子ども保護に関する幅広い情報が入るようになった。 * 訪問活動により、語学力のレベルが上がる。
2004.10	「充実・第2準備期」	* 遠足 * NGO 会議	* 俳句教室・日本語教室	* 第3回の有志キャラバン隊の訪問先探しにエイズ子ども病院訪問	* NGO との会議で、議論に参加できるようになる。
2004.11	「第2展開期」	* 有志キャラバン隊 1日目：4施設、路上から計240名 2日目：養護施設180名 ラジオ・テレビ・新聞取材。 * NGO 会議 * 選挙により体制変更しスタッフの多くが入れ替わる * 「世界の笑顔のために」プログラムにより寄贈品届く * 以前訪問したドイツ日本人幼稚園より寄贈品届く * 在ル日本人会の方から物品や寄付金が届く	* 俳句教室・日本語教室 * NGO でも日本語教室の要望が上がり、開始。 * 高校と隊員の連携（日本文明文化センター）について教員のための高校教育研究大会で発表 * テレビ・新聞取材 * JOCV について興味をもった高校数校を訪問。これまで連携してきた高校に JOCV 派遣が検討される。	* 他隊員のダンス教室応援 * 他隊員日本文化イベント応援	* イベントをやる度に子どもたちとの距離が縮まり、広い地域で子どもたちに声をかけられるようになる。このイベントのボランティアはコンスタンツアの方を巻きこんだ。子どもからも、関わった方からも反響が大きかった。 * イベントは成功であった。しかし、参加した隊員の充実感が足りず、準備期間中の議論不足により、隊員間に不和が生じた。 * NGO 会議で私の提案に協力的な雰囲気ができる。 * 研究大会の発表で自分の言葉で話ができ、語学に自信をもつ。 高校教員との関係がひろがる。
2004.12	「周囲が大きく動き出す期」	* 全体クリスマス(5施設、計185名) * ラジオ・テレビ・新聞取材。	* 俳句教室・日本語教室		* 全体クリスマス企画についても、各 NGO の責任者が積極的に役割分担をし、食材料等経済面でも協力を得る。

		* 施設クリスマスでラジオ・テレビ・新聞取材。 * 在ル日本人会の方々の子ども保護活動協力組織ができる。 * NGO に対する草の根無償プログラムに関わる。			* これまで、子ども保護局と距離のあった NGO が初めてイベントに参加した。 * 子どもの心を育てたいという意図を各スタッフが理解したイベントとなり、子ども保護局を中心とした各 NGO との連携の雰囲気がよくなった。 * 子ども保護局のスタッフは最低限の労働しかしたくないという様子で、責任者からの指示でしか動けず、イベントの持ち方について、論議する。 * 社会状況から見える問題「18歳以上の子どもたちの進路」等が法律上、活動上、生活上分かるようになってくる。それが草の根無償の話へと具体化し始める。 * 多くの日本人会の方が主旨に賛同し協力して下さり、人の力の大きさに感動。優しい心が物事を動かすと実感。
2005.1		* 盆踊り講習会（1施設、20名）と日本文化紹介番組テレビ出演、新聞取材。 * NGO 会議 * 子ども保護に関する法律改正 * スタッフの研修について話し合う	* 俳句教室・日本語教室	任国外旅行（ブルガリア）隊員の活動を訪問してまわる。	* 子どもたちの要望とテレビ記者との話がつながり、講習会と番組の企画となった。 * 川向こうの隣国を訪ね、ルーマニアと比較しながら、隊員活動を見学し、自分のこれまでの活動を振り返り、ルーマニアと日本にとって大切なことについて考える。 * 施設長からスタッフ研修について企画を求められるが、活動期間がなく、口頭のアドバイスで終わる。
2005.2	「活動のまとめ期」 「後任隊員への準備期」	* 各施設訪問し、最後のアクティビティとして書道やひらがなを教える。 * 書道展（4施設、100名）を芸術高校と県立図書館で開催 * ラジオ・テレビ・新聞取材。	* 俳句教室・日本語教室		* いろんな人に別れを告げながら、いつの間にか第2の故郷となり、離れ難いことに気付く。自分の愛するルーマニアを日本で紹介したいと強く思う

		* ラジオ生出演 * 各施設にてさよなら会			
2005.3	活動終了、帰国				* ボランティアでなく言葉の通じる母国で責任ある仕事に就けることをうれしく思いつつ、現任校へ着任。

ルーマニアにおける ストリートチルドレン保護活動

大阪府大東市立谷川中学校
養護教諭 堀口 かえで
15年度1次隊 ソーシャルワーカー



ルーマニアの子ども保護状況(2004年)

- ・保護施設: 1,363施設
- ・保護人数(0~18歳): 29,821名
- ・割合:

1歳未満	19.0%
1~2歳	2.5%
3~6歳	7.3%
7~9歳	10.1%
10~13歳	22.4%
14~17歳	38.0%
18歳	17.0%
- ・小児エイズ感染・発生数 3,558名
(うちエイズ発症者2,217名)
- ・コンスタンツァ子ども保護局 子どもファイル数 2,741名分

コンスタンツァのストリートチルドレン

- 1, ストリートチルドレンになる理由
家族の暴力(飲酒)
貧困
- 2, 春から秋にかけて増加する
- 3, 生活場所: マンホール、団地や建物の階段、廃屋
- 4, 生活の種: 駅や市場で物乞い、
窃盗(バスや市場の人混み、古鉄、
路上駐車の中内等)
- 5, 施設来所理由:
自來所
警察による保護
通報(近所の住人)



派遣時の目標

- ・子どもの笑顔を増やす
- ・生きる力を育てる
- ・ひとり一人との出会いを大事にする

隊員の役割

・最初の活動計画
ストリートチルドレンの現状把握
施設内における子どもの活動の充実
ルーマニアの子どもたちとその社会環境の把握



・変更した活動計画
NGOとの関係強化
子どもの保護・定着率の向上
国民の理解

人と人をつなぐ

ストリートリルドレンの為の昼と夜の 保護施設(一時保護所)



芸術週間



施設での活動・遠足



クリスマス



有志キャラバン隊:大きなカブ



訪問活動



書道展



日本文明文化センター:俳句・日本語



帰国後の活動



帰国後の活動:谷川まつり



平成18年1月7日
平成17年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム

「開発途上国における派遣現職教員の活躍」帰国隊員報告会
分科会 派遣現職教員の活躍

大阪府大東市立谷川中学校
養護教諭 堀口 かえで
15年度1次隊
ルーマニア ソーシャルワーカー

1. はじめに
2. 派遣国及び派遣先の概要
 - (1)ルーマニア コンスタンツァ
 - (2)コンスタンツァ子ども保護局
 - (3)ルーマニアにおけるストリートチルドレンの状況
3. 派遣中の活動(資料1参照)
 - (1)子ども保護局での活動
 - (2)日本文明文化センター
 - (3)絵画コンクール
 - (4)日本とルーマニアの幼稚園交流
 - (5)日本語教室
 - (6)柔術クラブ支援
 - (7)有志キャラバン隊
4. 青年海外協力隊としての役割
5. 帰国後の活動
 - (1)写真展
 - (2)「谷川まつり(地域教育協議会主催)」でのインターナショナルフェイスペインティング
 - (3)文化祭でのルーマニアコーナー
 - (4)人権選択学習
 - (5)ルーマニアへ野球道具や文具を送ろう活動
6. 派遣現職教員としての役割
7. 最後に